寒

三年　画数 12
筆順 宀 冂 冖 寒 寒
オン カン
クン さむ＝い

成り立ち

〝冬（2年202）〟といういみの〝冬〟と、さむさをふせぐための〝ほし草〟をあらわした〝丵〟と、家のいみをあらわした〝宀〟とを組み合わせて作った字です。

「家の中にほし草をいっぱいつんで、冬の〝さむさ〟にそなえること」をあらわした字です。むかしは、だんぼうのせっぴなどありませんでしたから、たいようねつをたくわえたほし草で〝さむさ〟をふせぎました。

〝さびしいこと〟〝まずしいこと〟のいみにもつかわれます。例寒村。

また、「心がぞっとすること」のいみにもつかわれます。例寒心。

使い方

▽寒い冬が来ると、池には氷がはって、雪がちらつきはじめます。家の中では、寒さをおいはらうために、暖房がたかれます。

▽内陸では寒暑の差がはげしいものです。夏は非常に暑く、冬は厳寒になります。

熟語例

▽寒暑（寒さと暑さ。「寒暑を繰り返して、十年という月日が経った」などというふうに、つかいます。）

▽厳寒（厳しい寒さ。「厳寒の頃には、のき先にはつららがはって、外出もままならない」などというふうに、つかいます。）

▽寒村（まずしい村。さびれた村。「旅の道すがら、とある寒村を通りかかった」などというふうに、つかいます。）

▽寒心（心がぞっとすること。非常に心配すること。「ちかごろの世相を見るにつけ、寒心にたえない」などというふうに、つかいます。）

感

三年　画数 13
筆順 ノ 厂 后 咸 咸 感
オン カン
クン

成り立ち

まさかりの形をあらわした〝戉〟と〝口〟とを組み合わせて、「まさかりをうちおろすときに出す〝かけ声〟」をあらわした〝咸〟に、〝心〟をくわえて作った字です。

「思わず大きな声が出るほど、〝心をうごかす〟」ことをあらわした字です。「ひどく心をうごかす」ことをあらわした字です。

〔今の〝まさかり〟は〝鉞〟と書く。〝針・釘〟などと同じようにあとから〝金〟を加えたものである。鉞は斧の大型のものである。〕

使い方

▽むかしの「からくり」を見て、感心しました。「からくり」は、今のおもちゃなどの、しかけに当たります。いろいろなくふうがされていて、おもしろく、本当に感心しました。

▽わたしは、本を読んで、感動すると、なみだが出て来ます。このあいだも、『ごんぎつね』という本を読んで、ごんが兵十にてっぽうでうたれたところで、ないてしまいました。

熟語例

▽感心（心に、いいなと感じること。また、ほめるべきだと感じること。）

▽感動（なにかにはげしく感じて、心を動かすこと。ふかく心をゆすられること。）

▽感想（なにかについて、心に感じたり思ったりしたこと。「作文に、本を読んだ感想文を書きました」などというふうに、つかいます。）

▽同感（同じことを感じること。考えが同じなこと。「きみのいうことに、ぼくも同感だ」などというふうに、つかいます。）